
代わりに話を聞いてやろう

natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代わりに話を聞いてやろう

【Nコード】

N3101K

【作者名】

n a t u

【あらすじ】

息が止まった気がした。

少年は、啞然としつつもう一度訊ねる。

「今、何て……？」

「だから、俺はもう生きれない」

「病気とかじゃ無いんだろ！？ そうだよな、だったらこんな屋上にこないもんな」

屋上。少年は、自分でそう言ってから目を見開いた。もしかして、と呟くが急いで考えを頭から消した。

息が止まった気がした。

少年は、啞然としつつもう一度訊ねる。

「今、何て……？」

「だから、俺はもう生きれない」

「病気とかじゃ無いんだろ！？　そうだよな、だったらこんな屋上にこないもんな」

屋上。少年は、自分でそう言うってから目を見開いた。もしかして、と呟くが急いで考えを頭から消した。

二年間過ごしてきた学校の屋上は、いつもよりも寒い気がした。何処から見ても優等生そうな友人が、何かを含んだ笑みを描く。

「おい……何するつもりだよ！」

「何もしないよ」

友人は、屋上の端に近づいてゆく。そこには、一メートル程の柵があり、その先は二メートル程歩ける場所がある。もしも柵を誤って跨いでしまっても、落ちないようになっているのだ。

柵に触れた友人に駆け寄って行き、その細い腕を掴んだ。

「何をするのか知らないが、まず何か聞かせろ。行動はその後だ」

「……分かった」

「ああ」

心のどこかでは分かっていたのかも知れない。

友人が死にたがっている事に。

柵に二人で持たれかかって座った。上を何となく見上げると、雲が呑気に浮かんでいて、太陽も灼熱の光を放っていた。

「あー」

何と言えばいいのか、さっぱり分からない。でも、死んで欲しくなかった。

何を言おうか迷っているうちに、友人から切り出してきた。

「俺、別にいじめられてなんか無いよ。殴られても無いし、蹴られても無い」

「え？ あ、そりゃ良い事だけどさ、じゃあ何で？ 何で生きれないわけ？」

「価値が無いんだよ」

友人は、切なそうに言う。

「生きる価値が無いんだ。誰も俺を見てくれない、そうだろ？ 誰も相手にしない……相手にする価値も無い。今日、お前がここにやって来たのも、暇潰しなんだろ。俺の気持ちの変化を悟ったんじゃないだろ？」

「……ああ」

少し迷ったが、はつきりと肯定した。疲れたし暇だから、屋上で寝ようとして来たのだ。出くわすとは思わなかった。

「でも、まあ死ぬ前に会えて良かった」

死ぬ前に会えて良かった。つまり、もうすぐ死ぬという事。

病気等では無く、自分で決める死。

つまり——自殺を企んでいるのだらう。

「もしかして、自殺するのか？」

「ああ」

何の躊躇もせず肯定する友人を、少年は虚ろな目で見た。

はつきり言って面倒だった。止めたいが、止めれないならどこかへ去ってしまいたい。

「止めるよ、俺はお前を価値あると思うぜ」

「要らないよ、止めないでくれ。どうせ、今だけだらう？ 後で、忘れるんだ」

「まあ……そんな事は無いと思うけど……」

少年は、嘘が下手だった。

だが、それで友人が死んでしまうのも嫌なので、首を横に振った。

「ずっとだ。ずっと、価値あると思う。俺の友達だし、俺が認めただからな」

友人と言っても、知り合いに近い友人だ。クラスが連続で同じで、丁度少年は知り合いが少なかった為初めは一緒にいる時間が多かった。

そのクラスに慣れてきたらもう話す機会は少なくなったが、それでも話す事はたくさんあった。

だが、ずっと一緒に居たいとは思わない。

だが、話はしたい。

そんな感じだった。

「じゃあさ、君は俺をどう思ってるの？ 取り巻き？ パシリ？」
「は、話し相手」

「話し相手？ そりゃ機会は少ないけど、機会が出来たらべらべら喋るし……それだけ？」

呆れたように笑う友人。

しかし、それですっきりさせてしまった様だ。

友人は、立ち上がった。

「じゃ、さよならとするよ」

「お、おい！」

「怖いけど……ね」

「おいッてば！」

友人の手を、勝手に右手が動いて掴んでいた。友人は、うざそうに振り返る。

その表情に見覚えがある。いつだったかは忘れた。

「何！？ もう止めてくれよ、冗談じゃ無い！」

「い、今は止める。お、俺が落としたみたいじゃ無いか！」

本心じゃ無い何かが、口から出る。

こんなに酷い事、言う気等さらさら無かったのに。

しかし、友人は振りほどこうとしていた腕を止めた。

そして、ゆつくり力を抜く。

「それが本音か、でもそりゃそうだね。明日にするよ……最後に話を聞いてくれた君へのお返しとしてね」

お返しとして、死ぬのを止めるよ。そう言いたかった。

だが、それを言う前に友人は少年の手を振り払って屋上の扉へと足を向けていた。

それを、追いかける気にも何か言う気にもなれない。

ただ、座り込んだまま空を見上げた。

雲が呑気に浮かんでいて、太陽も灼熱の光を放っていた。

「俺達がこんな事してても……世界は変わんないよなあ」

それを呟いてから、誰かに伝えたくなった。

そして、そういう思いをいつも聞いてくれるのが、さっきの友人だと思い出す。

それから、うざそうに振り返ったのはいつか思い出した。

「そうだ……俺と話をしてる時にしつこく他の奴等が、あいつに話しかけてたんだ。宿題見せてくれって……それで、あいつは……怒ったっけ」

俺は今、こいつの話を聞いてるんだ。邪魔をするな！ とそう少年は言った。

言ってしまったから、口元に笑みが広がった。

一人で喋っている。

おかしい、おかしくなってしまった。

少年は、誰も居ない事を確認して赤くなる。

「ツたく」

それから、すぐに思い当たった。

少年の話は長い。だから誰もあまり聞いてくれないのだが、あの友人はしっかり聞いて笑っていた。怒っていた。眉を顰めていた。悲しそうな顔をしていた。

それが、明日で無くなる。

無くなってしまふ。

自己中心的な理由だが、これが一番響いた。

それを伝えたら、止めてくれるだろうか。

分からないが、絶対止めないとならない。

そして、自分が代わりに話を聞いてやろうと少年は強く心に刻みつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101k/>

代わりに話を聞いてやろう

2010年10月8日15時08分発行